口繪解說

石橋誠道

口繪に掲げた五重相承血脈は、滋賀縣伊香立村新知恩院の所藏である。全部で十五卷あるが其中大譽慶竺上人が全譽上人に授げられたものが五卷と、(此の中に五重譜脈と都部五重譜脈がある。後の二種の周譽の譜脈も之に同じ) 大譽上人が周譽上人に授けられたものが五卷と、全譽上人に授けられたものが五卷あるから全部で十五卷である。此外全譽が周譽に授けられた圓戒許可狀一通、並に全譽が周譽に授けられた璽書一卷があるから、總て合せて十七卷ある。此中大譽が全譽に授けられた五卷と又大譽が周譽に授けられた五卷は大譽上人の親筆であるが、他は皆全譽の筆である。

我宗に於て譜脈に關する書類の古いものは、增上寺大巖寺大光院等に多く保存され、中には宗寶となつてあるものもあるが多くは德川初期の前後に屬するもので、新知恩院の所藏の如く古いものは極めて稀である。されば新知恩院所藏のものは昭和七年に宗寶として指定された。この中大譽慶竺は酉譽聖聰上人の門弟で白旗流を最初に關西に傳へ、百萬遍知恩寺の第二十一世となつた人である。次に全譽上人は、德蓮社酉淨全譽と稱へられてあるが其事蹟は明了でない。五重の譜脈に依れば大譽の門弟で周譽の師匠であるが、より多くの事蹟を知ることが出來ないのは殘念である。又周譽上人は、酉譽上人の門弟

の了曉上人の弟子であるが、大譽上人の後を承けて知恩院の第二十二世となり、應仁の亂を避けて一時伊香立の新知恩院に移り、亂治まつて後再び京都に歸り、知恩院を再興した人で、是れまた血脈の上に於ては大譽の門弟となつてゐる。而してこの全譽周譽の血脈が伊香立に存在することは、些か不合理のやうに思はるゝがそは曾て周譽が應仁の亂を伊香立に避けた時に、一時新知恩院へ持參したものがそのまゝ殘されたことに起因するのであらう。今や了譽酉譽等の眞筆の譜脈の見出されない際に、大譽全譽の譜脈の眞筆を見ることを得たのは、寔に嬉しいことであり、傳法沿革史上に於て、大に參考となるものである。今口繪に出したものは、藤堂祐範氏の好意に依るものである。